

第15章 万国博覧会	1
1 万国博覧会とは	1
2 万国博覧会小史	3
3 1900年のパリ万国博覧会と日本	8
4 1970年の大阪万国博覧会	12
5 2025年の大阪万国博覧会	16
注	17

第 15 章 万国博覧会

1 万国博覧会とは

万国博覧会は通称「万博」として知られている。戦後、日本も国際社会への復帰を果たす際に 1964 年の東京オリンピック開催、1970 年の大阪万博は大きな役割を果たした。暮沢剛巳『オリンピックと万博』（2018）では次のように指摘されている。



(1)

1964 年の東京オリンピックと 1970 年の大阪万博は、日本の戦後史に燦然と輝く未曾有の国家事業である。この 2 つの国家事業が空前の盛り上がりを見せた要因としてしばしば指摘されるのが、いずれも高度成長期に開催されたことや、戦後復興の象徴としての意味を担っていたことだ。⁽²⁾

一般的な「万国博覧会」の定義を新村出編『広辞苑』（第 7 版、2018）から紹介してみたい。

（International Exhibition）世界各国が参加する博覧会。最初は 1851 年ロンドンで開催。日本の公式参加は 73 年ウィーン万博から。1928 年国際博覧会条約がパリで締結され、日本は 65 年加盟。70 年に大阪で、2005 年に愛知県で開催。万博。⁽³⁾

では、現在の万国博覧会はどのような定義のもとで開催されているのであろうか。国際博覧会条約の第一条の定義を見てみたい。

第一条 定義

一、博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。

文化交流、文化外交という観点から見れば万国博覧会は重要なイベントである。

万国博覧会は、18世紀末にフランスで行なわれた国家が推進する国内産業品の展示会を起源とする。当初は国内市場の活性化を目的とした製品の展示会であったが、万国博覧会となることで国家間の製品競争となり、やがては様々なスペクタクルによって商品を幻想化していく資本主義の文化装置へとなった。

万国博覧会は、これまでの研究から大きく三つの側面に分けることができる。第一に国家間の技術競争、第二に消費と娯楽、第三に帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイである。この三つの要素はそれぞれからみあいながら万国博覧会を形成していた。⁽⁴⁾

ここには「国益」「パブリック・ディプロマシー」といった内容が明瞭に示されている。博覧会・万国博覧会には消費文化の広告塔という側面もあるが、本橋哲也『カルチュラル・スタディーズへの招待』（2002）で次のように述べている。

博覧会が成立するためには、自分の地域の生産物ではなく世界の各地域から集められた（ないしそうした幻想を与える）商品を見物・購買・消費する都市の人間が動員されなくてはならない。よってそのような欲望は、やがて百貨店や広告メディアを媒介する日常的な消費形式へと必然的に編成・拡散されていく。ロンドン、パリ、フィラデルフィア、シカゴ、東京といった都市における万博や勧業博が、19世紀以降の都市住民の商品世界との出会いの頻度・質量における飛躍的な拡大を持たらしたのもそうした事情による。⁽⁵⁾

「万国博覧会と日本」については、アジア歴史資料センターのホームページに「万国博覧会に見る日本」と題して、以下のように述べられている。

万国博覧会に最初に日本が登場したのは、1867年（慶応3年）のパリ万博です。しかし、この時は、幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ独自に出品を行っただけで、まだ「日本」という国を紹介するとは言えないかたちでした。この後明治維新が進み、初めて明治政府、つまり日本の政府として正式に万国博覧会に参加したのが、この次の1873年（明治6年）のウィーン万博でした。⁽⁶⁾

なお、過去の万国博覧会の開催地については外務省のホームページより閲覧することができます。2010年の上海万博でいまひとつ盛り上がりには掛けるのは、いわゆる目玉の展示がないことだ。本来ならば、エコカーなどが挙って展示されるべきところだが、どうもその様子もない。開催されてもお完成していないパビリオンがあるくらいだ。今回むしろ一番気になることは、国際博覧会条約第一条にある「公衆の教育」といったところだろうか。開催国の中華人民共和国のイベント開催手腕が問われたことは言うまでもない。チケット奪い合いやコンサートの中止は一般民衆というよりは中国全土から上海へ来た人民をどう誘導していくのかといった、主催側の準備不足とイベントに対する認識不足が原因であろう。また、よく言われることだが、列を作り、並ぶ習慣を小さいときから学校教育で知らない間に身に付けてきた国民から見ると、あまりにも「公衆教育」の欠如を感じる。今や自動車産業でも世界一となった中国は、今後どのような道をたどるのだろうか。

2 万国博覧会小史

過去の万国博覧会の開催地については外務省のホームページを参考にして紹介しておきたい。

【1800年代】

ロンドン 1851.05.01-1851.11.11 国際博覧会の
始まり

ニューヨーク	1853.07.14-1854.11.01	米国初の国際 博覧会
パリ	1855.05.15-1855.11.15	仏初の国際博覧会 始めて万国 博覧会と称す
ロンドン	1862.05.01-1862.11.1	日本の遣欧使節団が視察
パリ	1867.04.01-1867.11.03	日本初出品 「幕府」「薩摩」「鍋島」が参加
ウィーン	1873.05.01-1873.10.31	日本政府としての公式参加
フィラデルフィア	1876.05.10-1876.11.10	米国独立 100 周年
パリ	1878.05.01-1878.11.10	エジソンの蓄 音機、自動車、冷蔵庫等出展
メルボルン	1880.10.01-1881.04.30	
バルセロナ	1888.04.08-1888.12.10	
パリ	1889.05.05-1889.10.31	フランス革命 100 周年 エッ フェル塔建設 (エジソンの白熱電球で初の夜間照明)
シカゴ	1893.05.01-1893.10.30	コロンブスの新大陸発見 400 年 空中観覧車
ブリュッセル	1897.05.10-1897-11.08	
【1900 年代】		
パリ	1900.04.15-1900.11.12	クジ付き入場券を発売 地下鉄、動く歩道
セントルイス	1904.04.30-1904.12.01	ルイジアナ買収 100 周年
リエージュ	1905.04.27-1905.11.06	ベルギー独立 75 周年
ミラノ	1906.04.28-1906.10.31	
ブリュッセル	1910.04.23-1910.11	
アントワープ	1913.04.26-1913.12	
サンフランシスコ	1915.02.20-1915.12.04	パナマ運河開通記念 第 1 次大



戦勃発

	1928.11.22 国際博覧会条約採択 (施行は 1931.1.17)
バルセロナ	1929.05.19-1930.01.15
シカゴ	1933.05.27-1933.11.12
	1934.05.26-1934.10.31 はじめて「テーマ」登場 「進歩の世紀」
ブリュッセル	1935.04.27-1935.11.06 「民族を通じての平和」条約による最初の第1種一般博
パリ	1937.05.25-1937.11.25 「現代生活の中の芸術と技術」ピカソのゲルニカ出展
ニューヨーク	1939.04.30-1939.10.31
	1940.05.11-1940.10.27 「明日の世界と建設」ワシントン大統領就任 150 周年 ナイロン、プラスチック、テレビなど出展 第二次世界大戦
ブリュッセル	1958.04.17-1958.10.19 「科学文明とヒューマニズム」(第二次大戦後第1回の万博)
シアトル	1962.04.21-1962.10.21 「宇宙時代の人類」
ニューヨーク	1964.04.22-1964.10.18
	1965.04.21-1965.10.17 「理解を通じての平和」(BIE 非公認)
モントリオール	1967.04.28-1967.10.29 「人間とその世界」カナダ連邦 100 周年
大阪	1970.03.15-1970.09.13 「人類の進歩と調和」日本初の万博
スポーケン	1974.05.04-1974.11.03 「汚染なき進歩」
沖縄	1975.07.17-1976.01.18 「海—その望ましい未来」
ノックスビル	1982.05.01-1982.10.31 「エネルギーは世界の原動力」
ニューオリンズ	1984.05.12-1984.11.11 「河の世界—水は命の源」
筑波	1985.03.17-1985.09.16 「人間、居住、環境と科学技術」
バンクーバー	1986.05.02-1986.10.13 「動く世界、ふれあう世界」

ブリスベン	1988.04.30-1988.10.30	「技術時代のレジャー」 豪州建国 200 周年
大阪	1990.04.01-1990.09.30	「花と緑と生活の係わりを捉え 21 世紀へ 向けて潤いのある社会の創造を目指す」 (国際園芸博)
セビリア	1992.04.20-1992.10.12	「発見の時代」 コロンブス米大陸発見 500 周年
ジェノア	1992.05.15-1992.08.15	「クリストファー・コロンブス 一船と海」
テジョン (韓国)	1993.08.07-1993.11.07	「発展のための新しい道への挑戦」
リスボン	1998.05.22-1998.09.30	「海洋—未来への遺産」

【2000 年代】

ハノーバー	2000.06.01-2000.10.31	「人間—自然—技術」
愛知	2005.03.25-2005.09.25	「自然の叡智」
サラゴサ	2008.06.14-2008.09.14	「Water and Sustainable Development」
上海	2010.05.01-2010.10.31	「Better City, Better Life」
ミラノ	2015.05.01-2016.10.31	「地球に食料を、生命にエネルギーを」
ドバイ	2020.10.20-2021.04.10	「心を繋いで、未来を創る」

吉見俊哉『万博と戦後日本』(2011)では日本の万博について次のようにまとめている。

1970 年の「日本万国博覧会」(大阪万博)に始まって、「2005 年日本国際博覧会」(愛知万博)にいたるまで、日本ではこれまでに 5 回の万国博覧会が開催されてきた。大阪万博から 5 年後の 1975 年には、沖縄で「国際海洋博覧会」(沖縄海洋博)が開催され、その 10 年後の 85 年には筑波

研究学年都市で「国際科学技術博覧会」(つくば科学博)が開催されている。さらに5年後の1990年には、ふたたび大阪で「国際花と緑の博覧会」(花博)が開かれている。

逆にいうなら、日本において「万博」と呼べるものは、1970年、75年、85年、90年、2005年の5回しか開かれていないともいえるわけである。これらのうち、1970年と2005年はいずれも総合的な「一般博」として、75年と85年、90年は特定のテーマに絞って開催される「特別博」としてBIE(国際博覧会事務局)の承認を受けており、ちょうど2つの一般博の間にはさまれて3つの特別博が開かれてきたことになる。⁽⁸⁾

「expomuseum.com」というサイトには次のような説明があるので紹介しておきたい。

The three largest international events held on Earth are the Olympics, the World Cup, and world's fairs. Unlike the Olympics and the World Cup, however, world's fairs are focused on the visitor and not elite athletes. Anyone can be a part of a world's fair. Since their inception in London in 1851, over one billion people have visited a world's fair. Known in most of the world as "expos," the largest held so far was Expo 2010 in Shanghai, China.

Since 1851, there have been many events held throughout the world using the names "world's fair," "international exposition," "universal exposition," "world expo," and just "expo." By the 1920's the proliferation of these events lead to the formation of the Bureau International des Expositions (BIE), and international treaty organization, to help control the quality and frequency of the events. With the notable exception of the 1964-1965 New York World's Fair, all of these events since World War II have been held under the sanction or recognition of the BIE. Our site highlights the major world's fairs held throughout the world, but attempts to have a more comprehensive list

in our various timelines. ⁽⁹⁾

国際博覧会は規模などで大別して「登録博覧会（登録博）」と「認定博覧会（認定博）」の2種類に分けられる（以前は「一般博」と「特別博」の2種類に分けられていた）。

登録博覧会（登録博）（または「総合的な万国博覧会」）
(International Registered Exhibition (or World Exhibition))

開催間隔 (Frequency) : 5年おき (every five years)

開催期間 (Duration) : 6ヶ月以内 (6 months at most)

会場面積 (Area) : 制限なし (not restricted)

テーマ (Theme) : 一般的・総合的な内容 (注: 国際博覧会の規定にある分類であり、総合的であること) (general (cf. General classification for International exhibitions))

認定博覧会（認定博）(International Recognised Exhibition)

開催間隔 (Frequency) : 2つの登録博覧会の間 (during the interval between two International Registered Exhibitions)

開催期間 (Duration) : 3ヶ月以内 (3 months at most)

会場面積 (Area) : 25ヘクタール以内 (25 ha at most)

テーマ (Theme) : 特定・専門的な内容 (specialized)

オリンピックがスポーツの祭典とすれば、万国博覧会は科学技術を世界にプレゼンする絶好の機会と言える。もちろん、文化的な芸術をアピールすることも重要である。この点で言えば、万国博覧会はパブリック・ディプロマシーと大いに関係して来るため、何を全面に押し出すかが重要となろう。

3 1900年のパリ万国博覧会と日本

1900は元号で言えば明治33年である。明治維新から30年以上が経過し、

国体も安定した時期と言ってよい。近代化を推進中の日本にとって、この1900年のパリ万博はこれまでとは全く異なった捉え方ができだろう。

1900年のパリ万博については林忠正シンポジウム実行委員会編『林忠正ジャポニズムと文化交流』（日本女子大学叢書3）（ブリュッケ、2007年2月）がよい参考となる。「木々康子ホームページ」によれば、林忠正(1853-1906)は美術商としてジャポニズムを側面から支えた一人である。1876年のパリ万国博覧会の通訳として貿易会社に入社。それ以降は日本美術をヨーロッパに積極的に紹介し、さらに1900年のパリ万国博覧会では日本館の事務館長を務めた。⁽¹⁰⁾ さらに吉田典子「一九〇〇パリ万国博覧会—政治・文化・表象」（2000）によれば、この万博の特徴を3点挙げている。第1に工学技術に対する装飾の優位、アール・ヌーヴォーの興隆、第2に植民地展示の拡大と商業告知の優位、第3にスペクタクル、イリュージョン、アトラクションの優位としている。⁽¹¹⁾ もちろん、この現象が突然現れたわけではないが、1900年になって明確な形で登場したということである。

1900年のパリ万国博覧会は課題を抱えていた。井上理恵『川上音二郎と貞奴Ⅱ』（2015）によれば、次の通りである。

フランスは、前回（1889年）のパリ万博でエッフェル塔を作り、この1900年の第5回では世界最大の観覧車を一般公開し、動く歩道やエッフェル塔にエスカレーターを付けて驚かしていたが、さらに客を呼び込める催しを探していた。人が集まらなかったからだ。スチーブンはフラーに川上一座を呼んだらどうかと助言し、2人でロンドンへ来た。これはフランスで散々踊ってきた電気踊だけで客を呼べるとは、フラー自身も思っていなかったことを示している。この時期からフラーはマネージメントを専門にするようになるのをみてもそれは理解される。⁽¹²⁾

日本の場合では、1900年のパリ万国博覧会で注目を集めたものに川上音二郎一座の興行がある。川上音二郎一座は1899年4月よりアメリカでの興行を行い、その後イギリスに渡っていた。そして、パリへ出向いたのである。この川上音二郎一座の興行はいわゆる日本館の公式の祭事ではなく、ロイ・

フラ―(Loie Fuller, 1862-1928)が興行主として7月4日より『遠藤武者』『芸者と武士』を上演したものだ。川上の演出は日本演劇を正確に演じることでなかった。松本孝徳・福永洋介・持田明子「パリ万国博覧会を契機とした日本文化受容―川上音二郎・貞奴を中心に」(2007)によれば次の通りである。

芝居は日本語で上演されていたため、彼は言葉の障害を考察し、セリフを省いたり、あるいは筋立てを短かくしたりした。言い換えれば、構成面で彼は観客の好みを取れ入れていったのだった。(13)

さらに8月19日には栗野慎一郎フランス公使の幹旋であったが、エリゼ宮でルーベ大統領の園遊会に招かれ、『道成寺』を演じ、11月5日にはフランス政府より「オフィシエ・ド・アカデミー3等勲章」が授与された。(14)

白川宣力編『川上音二郎・貞奴―新聞にみる人物像―』(1985)の「川上一座上演略年表」には「33・川上一座、欧米を巡業す」とあるだけだ。「資料・新聞掲載記事集成」の1900年(明治33)には「パリの川上一座」の項目がある。12月13日の『都新聞』、『中央新聞』にはフランス政府より3等勲章が授与されたことが報道されている。(15) 報道によると、通常5等以下であるにも拘わらず、破格の3等勲章が授与されたことは一大名誉であるとしている



白川宣力編『川上音二郎・貞奴』



金尾種次郎『川上音二郎欧米』

貞奴』(雄松堂書店、
1985年11月)

漫遊記』(金尾文淵堂、
1901年2月)

1900年のパリ万国博覧会は世界的にはどのようにとらえられていたのだろうか。森崎美砂「万国博覧会」(2013)を見ておきたい。

ナショナリズム高揚期に行われた1900年のパリ万国博覧会では、各国が独自の大建造物を準備し自国のイメージを強調した。工業化に代わって人間性復活や環境保全が人類共通のテーマとして掲げられるようになり、かつ企業の国際化が進むと、各企業の国際的イメージの強調に展示の重心がシフトしてきた。展示の仕方も変化し、近年の万博ではモノを展示する見本市形式ではなく、新しい技術と文化の情報を多量に視覚的イメージとして提供する展示が中心となっている。⁽¹⁶⁾

パリではジャポニズムやアール・ヌーヴォーが流行っていただけに、日本への注目高かった。川上一座が登場したことについては井上理恵『川上音二郎と貞奴Ⅱ』(2015)では次のように触れている。

開会当初は人が集まらなかった。つまり科学(今回は、世界最大の観覧車、動く歩道や汽車、エスカレーター、気球などがでた)は人気が出ていたが新鮮な客寄せにならなかった。フランス政府は既に驚かせる科学は終わっているとみて、芸術で世界の先端を歩いているフランス政府は、さらなる新しい客寄せを考え、動く芸術—電気踊りを踊るロイ・フラールに白羽の矢を立てた。しかしフラールは自分1人では客寄せは無理と判断してアメリカやロンドンで話題になっていた川上一座に声をかけたのだ。流行利のジャポニズムも川上一座の後押しをしたのだろう。遅れて参加した川上一座は大人気演劇集団で毎日喝采を浴びた。ジャポニズムとアール・ヌーヴォー(Art Nouveau)が時代の焦点だったパリで、川上一座の新演劇は、その両方を満足させる芝居となったのだ。彼らはアール・ヌーヴォーという新しい芸術思潮の仲間入りをしたとわたくしは思っている。

「鞆当」と「道成寺」をくっつけたり、「兒島高德」のさわりを演じたり、「袈裟御前」を現代風にアレンジしたり・・・等々、川上は現在なら殆ど批判の対象にもならない様な演劇を生み出していた。〈お引きずり〉の衣裳で髪を振り乱し清姫(葛城)を演ずる貞奴やくさいたか坊主〉の登場や、武士たちの戦いと切腹を見せた音二郎と男優たちの創り出す異装集団の演劇世界は、歌舞伎の見せる〈定型〉を壊した新しい世界を出現させた。それだけで〈ヌーヴォー〉だったのだ。彼らは「歌舞伎」を観たかったのではない。演出者川上とその集団が演じる〈今〉を観たかっただけだ。東洋の小さな国の演劇集団が表現した舞台に〈新しい感性〉を感じ取ったのだ。その事実をわたくしたちはまず認めなければならない。これまでのうおうなくまず歌舞伎ありき〉で〈実際の歌舞伎とは違う〉という視点からのみ一座の舞台を評価し、悪意を含んだ伝聞批判ばかりを取り上げて裁断するのでは事実を見過ごす。川上一座は、新演劇集団であったのだから・・・。(17)

4 1970年の大阪万国博覧会

柴崎信三『〈日本のなもの〉とは何か ジャポニズムからクール・ジャパンへ』(2015)によれば、大阪万国博覧会の具体的な構想は1964年に固まったようである。

東京五輪が開かれた1964年の春、「万国博を考える会」が大阪に発足し、民族学の梅棹忠夫や社会学の加藤秀俊、SF作家の小松左京らがメンバーとなって、博覧会の基本理念やテーマの設定などの検討が行われた。その過程でテーマ館のプロデューサーとして小松が強く推したのが岡本太郎であった。(18)

大阪万国博覧会のテーマは「人類の進歩と調和」で、開催期間は1970年3月15日～9月13日(6ヵ月、183日間)で、77ヵ国が参加し、1964年の東京オリンピックに続き、戦後、高度経済成長を成し遂げアメリカに次ぐ経済

大国となった日本の象徴的な意義を持つイベントとして開催された。

動員数は6,421万8,770人である。特に、万博史上はじめて、黒字になった万博としても評価されている。

当時の日本の展示・出品物には以下のようなものがあった。

温水洗浄便座（ガス館）

動く歩道

エアドーム（アメリカ館、富士グループパビリオン）

ワイヤレスフォン（現在の携帯電話、電卓の機能まですでに内蔵されていた。電気通信館。）

コンピュータ・ハンド・ゲーム（古河グループパビリオン）（人間の声でクレーンを操る大型のクレーンゲーム機。1985年からUFOキャッチャーという商品名で発売され、ゲームセンターなどを中心に全国で普及した。）

柴崎信三『＜日本的なもの＞とは何か ジャポニズムからクール・ジャパンへ』（2015）には次のように解説している。

千里丘陵の万博会場は全体で330ヘクタールという広大な敷地を切り開いて中央の約1キロにわたってシンボルゾーンが設けられ、「お祭り広場」と「太陽の塔」に各テーマ館、エキスポタワーなどが配置された。ここから四方に「動く歩道」がつながり、入場者は全体で116にのぼるパビリオン群を巡り歩く。巨大なマルチスクリーンの映像や音声認識のロボット、自動制御で衝突を回避する自動車やのちの携帯電話につながる移動体通信など、各企業館の展示には今日の最先端技術に重なる画期的な試みが組み込まれていた。

海外からは76ヶ国の政府、4つの国際機関などが参加したが、アポロ12号が人類初の月面着陸を果たしたのち、持ち帰った「月の石」を展示するアメリカ館には連日長蛇の列ができた。科学技術と文明の未来に対する人々の迷いのない期待が、そこにはあった。⁽¹⁹⁾

「人類の進歩と調和」は科学の進歩と調和を意味している。あまり知られていないが、万博会場へは、原子力専門の日本原子力発電の敦賀原発から3月に送電されていた。8月には関西電力の美浜原子力発電所から原子力の電気が万国博会場に試送電された。日本が被爆国として原子力とどう向き合うかという大きな課題を抱えていたが、原子力発電所の稼働はまさに人類の進歩と調和のシンボルでもあった。

万博が開催された1970年は実は波乱に富んだ1年でもあった。柴崎信三『＜日本的なもの＞とは何か ジャポニズムからクール・ジャパンへ』(2015)によれば、以下の通りである。

3月に始まった大阪万博は9月の閉幕までに内外から6420万人の入場者でにぎわい。人々は日本が開花させたテクノロジーや消費文化を通して未来へ広がる豊かな社会の手触りをそこに実感した。しかし開幕からほどなく3月末、「赤軍派」を名乗る過激派学生が日本航空の羽田発福岡行きの定期便「よど号」を航行中の機上でハイジャックし、途中乗客ら103人を解放したあと、北朝鮮へ亡命するという事件が起きた。

半年にわたる万博が高度経済成長の日照りのなかで幕を下ろしてから二ヶ月余りを経て、師走の足音が聞こえ始めた11月25日、今度は審美的な作品で知られた作家の三島由紀夫が国粋派の集団である「盾の会」のメンバー4人とともに東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部に乱入し、幹部を人質にクーデターを呼び掛けて失敗し、割腹自殺を遂げた。戦後の目覚ましい＜成長＞の渦の中で公害問題などの陰画が広がり、戦後社会の背後に広がる根源的な問いと懐疑や不信が激しく噴き出した年であった。⁽²⁰⁾

ここで1970年のおもな日本での出来事、あるいは日本にも大きな影響のあったものを取り上げておく。

2月3日 日本政府、核拡散防止条約、調印

- 2月 11日 東京大学宇宙航空研究所、初の国産人工衛星「おおすみ」の打ち上げ成功
- 3月 14日 大阪、万国博覧会（～9月 13日）
- 3月 14日 敦賀原子力発電所、運転開始（万博会場へ初送電）
- 3月 31日 日本航空よど号、ハイジャック事件
- 8月 2日 東京都内で初めて歩行者天国
- 8月 8日 美浜原子力発電所、万博会場へ送電（11月 28日より営業運転）
- 8月 19日 全日空アカシア便、ハイジャック事件
- 9月 22日 米上院で大気汚染防止法（マスクー法）が可決
- 10月 16日 キヤノン、国産初コピー機 NP-1100 を発売
- 11月 21日 ケンタッキー・フライドチキンの日本第 1 号店、名古屋にオープン
- 11月 25日 三島事件

1970年以降になるが、ここで小松左京『日本沈没』（1973）にも注目しておきたい。柴崎信三『＜日本的なもの＞とは何か ジャポニズムからクール・ジャパンへ』（2015）では次のように紹介している。

テーマ・プロデューサーに岡本太郎を推薦した小松左京は万博の終了後、『日本沈没』という近未来小説を書いてベストセラーになった。日本が人口減に転じた近未来のある時点で、日本海溝に亀裂が走りだし、地殻変動による乱泥流に巨大地震が重なって日本列島が水没するという衝撃的な物語である。国民は次々と脱出して国外に移住し、流浪の民となる。約 40 年の歳月を経て東日本大震災を経験した現在から改めて読めば、その筋書きはあながち荒唐無稽とばかりはいえない。⁽²¹⁾

小松左京(1931-2011)は『日本沈没』の執筆を 1964 年から開始し、万国博覧会を経て、1973 年 3 月 20 日に光文社カッパノベルスより出版した。1973 年は万博の影響を受け、明るい未来への希望もありながら、オイルショック

に見舞われ、インフレとなり、また、1923年の関東大震災から50年目という節目の年でもあった。なお、1973年12月29日には森谷司郎・中野昭慶監督『日本沈没』（東宝）として公開された。同作品は2006年にリメイク版として樋口真嗣監督『日本沈没』（東宝）も公開された。

5 2025年の大阪万国博覧会

2018年11月23日にパリで行われた国際博覧会事務局の総会で、2025年万国博覧会の開催地に大阪が決定した。

テーマ：いのち輝く未来社会のデザイン

開催期間：2025年5月3日(土)～11月3日(月)185日間

開催場所：大阪 夢洲(ゆめしま)

想定来場者数：約2,800万人

経済波及効果(試算値)：約2兆円⁽²²⁾

決定すると開催までの計画や跡地の利用について早くも様々な報道もなされている。

2025年大阪・関西万博が実現したら…

- 最先端技術など世界の英知が結集し新たなアイデアを創造発信
- 国内外から投資拡大
- 交流活性化によるイノベーション創出
- 地域経済の活性化や中小企業の活性化
- 豊かな日本文化の発信のチャンス⁽²³⁾

メインテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」のもと、サブテーマは以下のように設けられた。

- ・多様で心身ともに健康な生き方

- ・持続可能な社会・経済システム
- 「人」(human lives)にフォーカス。
- 個々人がポテンシャルを発揮できる生き方と、それを支える社会の在り方を議論。⁽²⁴⁾

2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催、そして2025年に大阪万国博覧会の開催とかつての1964年と1970年の開催と同じように日本にとっては大きな国際イベントとなる。しかし、交通機関も羽田空港から成田空港、さらには関西空港なども整備され、1964年及び1970年当時とは全く異なる状況である。しかし、現在でも外国人観光客と日本人観光客が一度に集中すると飽和状態になることは周知の通りである。特に宿泊施設の不足が問題となっている。政府は民泊といった新たな方策を打ち出しているが、問題は山積している。

注

(1) 写真

(https://search.yahoo.co.jp/image/search;_ylt=A2Rivb6rd9BYkxsANhCU3uV7?p=%E5%A4%AA%E9%99%BD%E3%81%AE%E5%A1%94%E3%80%80%E3%80%80%E4%B8%87%E5%8D%9A&aq=-1&oq=&ei=UTF-8#mode%3Ddetail%26index%3D21%26st%3D654)(2017年3月21日アクセス)

(2) 暮沢剛巳『オリンピックと万博—巨大イベントのデザイン史』(筑摩書房、2018年2月)、pp.20-21

(3) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応したロゴヴィスタDVD-ROMより(頁表記なし)

(4) 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』(吉川弘文館、2008年6月)、1頁。

(5) 本橋哲也『カルチュラル・スタディーズへの招待』(大修館書店、2002年2月)、p.117.

- (6) 「5 万国博覧会に見る日本～明治・昭和の『COOL JAPAN』～」
(<http://www.jacar.go.jp/spcial/p05/index.html>)(2010年1月4日アクセス)
- (7) 「エッフェル塔」
([https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%AA%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_\(1900%E5%B9%B4\)#/media/File:Eiffel_Tower_7.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%AA%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_(1900%E5%B9%B4)#/media/File:Eiffel_Tower_7.jpg))(2017年3月16日アクセス)
- (8) 吉見俊哉『万博と戦後日本』（講談社、2011年7月）、p.42.
- (9) <http://www.expomuseum.com/>(20160731 アクセス)
- (10) 「木々康子ホームページ」(homepage3.nifty.com/kigiyasuko/list.html/isobe/)(2010年6月6日アクセス)
- (11) 吉田典子「一九〇〇パリ万国博覧会—政治・文化・表象」（『国際文化学』第3号、神戸大学国際文化学部、2000年9月）、p.15-16.
- (12) 井上理恵『川上音二郎と貞奴Ⅱ』（社会評論社、2015年12月）、p.175.
- (13) 尾関英正「西洋人の見た川上音二郎一座と壮士芝居」（『アジア研究所紀要』第16号、亜細亜大学、1990年2月）、p.169.
- (14) 松本孝徳・福永洋介・持田明子「パリ万国博覧会を契機とした日本文化受容—川上音二郎・貞奴を中心に」（『九州産業大学国際文化学部紀要』第37号、2007年9月）、p.149-150.
- (15) 白川宣力編『川上音二郎・貞奴—新聞にみる人物像—』（雄松堂書店、1985年11月）、pp.328-335.
- (16) 森崎美砂「万国博覧会」（石井敏・久米昭元編『異文化コミュニケーション事典』春風社、2013年1月）、p.508.
- (17) 井上理恵『川上音二郎と貞奴Ⅱ』、pp.180-181.
- (18) 柴崎信三『<日本的なもの>とは何か ジャポニズムからクール・ジャパンへ』（筑摩書房、2015年8月）、p.265.
- (19) Ibid. ,p259.
- (20) Ibid., p.249.
- (21) Ibid., pp.268-269.
- (22) <https://www.expo2025-osaka-japan.jp/overview/> (2019年2月23日)

(23) Ditto.

(24) Ditto.